

## 二、明心成就

一。本文。「如是菩薩智慧心方便心無障心勝真心能生清淨仏国土。応知。応知者謂応知此四種清淨功德能得生彼清淨仏国土非是他縁而生也。」

一。能生仏国土。この節は、四心成就して能く浄土に生ずることを明し、以て業事成弁することを顕すのである。

智慧心等の四心は、第五回向門の諸心である。回向は、菩薩の方便波羅蜜であつて、大菩提の正因である。であるからこの四心を正因として仏国土に生ずるのである。この四心こそは、自利利他の利他であるが故に、利他は必然に自利利他の自利を究竟成就するのである。であるから、この四心成就こそ願事成就円満する相である。

或説には、この四心について、二の相對あることを示す。この中の二対とは、まず、智慧心方便心の一对である。この真俗二諦に望めて立するのである。即ち、真諦の如に契うを智慧心とする。即ち般若波羅蜜である。次に俗諦の差別を縁するを方便心とする。即ち方便波羅蜜である。この一对は名義撰対章の意である。

次に、無障心と勝真心との一对である。無障心は、方便波羅蜜中の初起の位、勝真心はその後増進の位である。

これによつて知らるるが如く、智慧心は、般若波羅蜜の如に達する慧とよばれたものである。それを今、回向門の諸心に撰められるのは、ここが即ち名義撰対の、相順相撰の義門を示される所である。智慧方便は、相縁りて動き、相縁りて静かなる、方便心が備さに衆機を省みて而も宛然として、動せず、無知なる、般若の慧の静にしてしかも方便の動を廢せるは、これ皆、般若に撰められる方便なるが故である。この相縁の門なるが為の故に、智慧心が自然に回向門の四心となるのである。今、能生清淨仏国土と云わるるは、この四心によつて正因円満せることを顕すのである。即ち、菩薩が正しく清淨なる仏国土に往生する因は、四心具足の五念門の行である。

### 一。非他縁生。

「応知とは謂く、この四種清淨の功德能く彼の清淨仏国土に生ずることを得しむ。是れ他の縁をして生ずるには非ずと知る応しとなり。」

この釈、四心を除いて更に浄土往生の余因なきことを示されたものであつて、自利利他成就せんとする菩薩は、必ずこの四心に生きて一切衆生と共に願生するのである。しかるにここに一の疑問がある。一論の所被の機は、下々品の劣機ではないか。然れば下々品の劣機もこの菩薩回向門の四心を起こさねばならないこととなる。下々品の劣機も具足しなければならぬこの四心を何故に回向門に出すのであるかという事である。

一論所被の機は下々品である。しかも回向門の諸心を因として往生するのである。けれども、往相回向の生活者としての願生者は、この四心を我がものとは考えず、これを如来の巧方便回向の願心の内容として信知するであろう。故に、論の文も、

「是の如きの菩薩は智慧心方便心無障心勝真心をもて能く清浄仏国土に生ぜしめたまえり。」

と訓点を施されるのである。これ、この四心をもつて法体成就の徳、やがて信の体徳として示されるのである。もし行者の心の行相を論ずれば、往生一定の行相、即ち無疑の一心に外ならない。故に下々品の劣機にありても亦、この四心の徳を内具して浄土の真因として、願力成就の土に入ることを得るのである。

一。四心と本願回向の一心。

已に述べるが如く、智慧心、方便心、無障心、勝真心の四心を具足してのみ、浄土に往生することが出来るのである。故に今、「この四種清浄の功德能く清浄仏国土に生ずることを得しむ。是れ他の縁をして生ずるには非ずと知る心し」と論には示されるのである。しかるにこの論の意は、「他縁をして生ずるには非ず」とは、「仏の回向にして他の因には非ず」との心であつて、この四心は法体成就の徳、やがて信の体徳を示されたものとなり、行者の機に約せば、無疑の一心に外ならないのである。であるが故に、如何に下々品の劣機といえども、この四心の徳を内具して清浄仏土に往生するのである。

然らば、何故に、無疑の一心を因として仏土に生ずると云わずして、体徳について四心を立てるのであるかという疑問を生ずる。

これ論の意は、浄土の大菩提心を安立せんとするのである。浄土の大菩提心はこの四心を具足することを顕すのである。しかして、仏道の正因は但この四心を具足する<sup>2</sup>巧方便回向門、即ち第五の回向門にあり、故に、論主はこれを安立して以て浄土の正因とせんと欲したまうのである。故に智慧等の四心を体徳として立てて、これを浄土の回向門ならしめ、浄土の真因に当てられるのである。

この四心を全うする回向門こそは仏道の正因である。これを浄土の大菩提心として、還相の菩薩は正しく、この回向門によつて、回向を首として大悲心に生きているのであるし、往相の行者は、回向門によつて、この四心を全うしたる一心帰命の信心を回向せられて、浄土に往生するのである。身、生死界にあつて度せらるべき衆生が、自ら還相菩薩の回向の相をとることは、己を深信せざる憍慢ではあるが、しかしこの四心を全うする大信を發起すること能わぬものは、自力疑心の世界を出ることの出来ぬものである。

されば、この四心こそは行者の無疑の一心である。

何故ならば、天親論主は、建章の自督門に於いて、一心帰命を以て、願生浄土の正因を示された。これ、自利利他の自利の相である。しかるに、回向門は、自利利他の利他門である。自利利他すでに一如である。一心帰命の自利には、利他の徳を具足して、如何なる下々品にも回向せられて、浄土の正因となるのである。四心は、無疑の一心となるのである。

されば宗祖は、信巻末に、願成就の一念の異名を列ねて後、

「是の心は即ち是れ大慈悲心なり。是の心は即ち是れ無量光明慧に由りて生ずるが故に、願海平等なるが故に発心等し。発心等しきが故に道等し。道等しきが故に大慈悲等し。大慈悲は是れ仏道の正因なるが故なり。」

と示された。これ浄土の莊嚴性功徳を説かれる時には仏の上に顕された大慈悲を、今はこれを行者の上にあらしめたもうたのである。知るべし。如来の徳は、悉くこれを行者の上にあらしめたもうたことを。更に二門偈を開けば、

「云何が回向する、心に作願したまいき。苦惱の一切衆生を捨てずして、回向を首と為て大悲心を成就することを得たまうが故に、功徳を施したもう。」

と、大慈悲を本仏の上にあらしめたもうた。これ正しく仏にあつては、大悲心を正因として正覚を成就し、衆生にあつては、その大慈悲の回向によつて無疑の一心帰命を發起し、還相の菩薩は、この大慈悲に由つて利他度生を成ずるのである。誠に、もしは仏、もしくは菩薩、もしくは衆生、悉く大慈悲を以て仏道の正因となすのである。かくの如く、生仏交互して、大慈悲より外、真因に二なきを第十八願絶対他力の法門とするのである。

智慧心、方便心、無障心、妙樂勝真心の四心こそは、大慈悲の具体的内容である。一心帰命即ちこの四心なること知るべきである。これを外にして、仏土往生の正因はあり得ないのである。されば、他縁を遮して、

「応知とは、謂くこの四種清浄の功徳能く彼の清浄仏土に生ずることを得しむ。是れ他の縁をして生ずるには非ずと知る応し」

と仰せられるのである。一心即四心、四心の体徳を全うする帰命の一心なることを知るべきである。心成就の積、了る。